

■ ドル/円相場は日米の物品貿易協定（TAG）交渉の行方が気掛かり…

昨日（4/10）、欧州連合（EU）はブリュッセルで臨時首脳会議を行い、英国のEU離脱期限を10月31日まで延期する妥協案で合意した。6月末までの短期の離脱延期を求める側と最長1年程度の長期延期を求める側とのちょうど間をとった格好である。

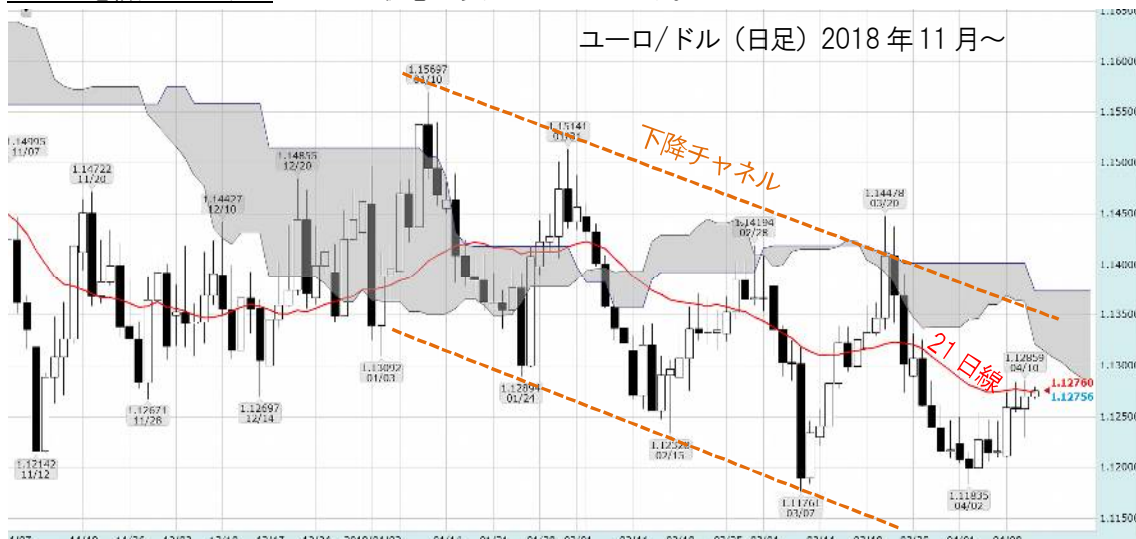
ひとまず「合意なき離脱」の脅威が取り除かれたことは一安心。ただ、市場にとっては既に織り込み済みとなっており、さしたる反応は見られていない。むしろ、今後は事実上の「敗北」を喫したメイ英首相の進退が大いに問われることとなり、これまでとは別の次元でポンド相場が波乱含みとなる可能性も高いと見られる。

いずれにしても、これでポンドの上値の重しが外れやすくなったとは考えにくく、対ポンドでのドルの優位も今しばらくは基本的に変わらないものと見られる。今のところ、ポンドドルの週足は31週線に下値を支えられる一方で、上値は一目均衡表の週足「雲」下限と62週線にガッチリ押さえられた状態にある。よって、なおも当面は戻り売りのスタンスを基本としたい。

同様に、ユーロ/ドルの上値も依然として重いままである。昨日行われたECB理事会では、政策の現状維持が示される一方で、このところドラギ総裁が言及していたマイナス金利の悪影響への対応などについても検討姿勢が示されるだけに留まった。

足下で確認されているユーロ圏の景気減速の度合いを考えれば、ECBの対応は「いかにも生ぬるい」との判断が、総裁会見後に市場が一旦ユーロ売りに傾く場面もあった。後に発表された3月の米消費者物価指数（CPI）の結果が比較的弱めであったことから、米国のインフレ圧力の弱さに着目したドル売りが生じて、ユーロ/ドルは往って来いの展開に…。

とはいえ、目的には21日線の抵抗に押し戻される状態が続いており（下図参照）、仮に同線を上抜けたとしても年初から形成されている下降チャネルの上辺や日足「雲」が次の上値の重しとして意識されやすいといった状態は変わらないだろう。



なお、昨日はドル/円が一時111円を下回る水準まで下押し場面があり、少々下値警戒感が強まる状況となってきている点にも着目しておきたい。やはり、市場は来週15日から始まる日米の物品貿易協定（TAG）交渉の行方を気に掛け始めているようであり、とくに「為替条項」が加えられた場合の市場の反応がどうにも気になるところではある。

ただ、これまで米国が通商交渉を行った国々との協議には例外なく為替条項が入っているわけで、日本だけが対象から外れると考える方がやや無理筋である。その意味では、仮に今回の交渉で為替条項というワードが出てきたとしても、それが大きな流れを変えるだけのインパクトを持つとは考えにくい。ワードが出た瞬間にアルゴリズムが反応して一旦円高方向に触れれば、そこは短期でドル/円を買い拾うチャンスになると思われる。ドル/円の日足「雲」上限や月足「雲」上限、週足「雲」下限などは重要な節目として再認識しておきたい。（04月11日 11:30）